地名からみたロシア

中村泰三

はじめに

地名学という地名の謂、その他を研究する分野があり、地理学がこれと係わりを持っているのは世間でも一般に知られている事実であろう。事典類での地名の執筆に際し、特に自然地名の執筆に地理学専攻の研究者が依頼されるのが通常だからである。しかし、地理学の歴史をたどると地名の研究を地理学が重要な研究分野としきたというわけではない、地名はその多くが居住する人々によってつけられ、それが途中で変ることもあるが、長年にわたって発音に変化が生じても続いてきたものであるゆえ、歴史学からこの分野を研究する人々によって取上げられたのは、ヨーロッパでもわが国でも類似の傾向をもっている。吉田東伍氏の大日本地名辞書は今日も活用される秀れた地名研究書であり、日本歴史地名大系五〇巻は四半世紀にわたって各府県ごとに編集され、本年で終了することになっている。地名はまた、地名学という独立した専門分野で研究されているが、その始まりは比較的新しく、わが国では一九四二年の大和地名研究所（現日本地名研究所）の設立からである。

このような研究の歴史的経過はあるが、地名の研究はこれまで往々にして評価が低かった、地名の解釈、起源の研究に非科学的な独断や偏狭さがあり、大方の人々を納得させるに足る内容を持たなかったことにもよる。また、地名の研究を困難にしているのは多くの学問分野——言語、歴史、地理、民俗学など——の知識を必要とするからである。ヨーロッパを流れる大河の名称ドナウ、ドネストル、ドネプル、ドン川に共通する頭音は川を意味しているといわれ、同一言語から発生したとされている。今日ではここにかつて居住していたイラン系の民族の言語に由来しているといわれるが、現在北カフカスに居住するイラン系の少数民族オセチア人の言語でドンは川を意味していることからも根拠のある説である。このような例は他の言語でも多数みられることである。

ところで筆者がソ連、東欧の地名と係わりをもつようになったのは一九六〇年代ごろからであった。当時百科事典出版の全盛時代で、著名な出版社が百科事典やそれに類する書籍を出版していた。

百科事典には当然のことながら地名の項目があり、その執筆担当に地理学研究者に声がかかるのは自然の成行であった。ただ筆者の研究地域であったソ連、東欧は地理学の研究者が少なく、そのため研究者の多かった歴史、経済分野などの研究者が書いておられた。周知のよ

うに地名は広い範囲にわたる諸項目を書かなければならないので、文科系の人々の多くが苦手とする自然科学分野、つまり地質、地形、気候などに関する記述も必要なので、執筆に苦労されたことと推測している。それでも読んでみてなかなか良く書いてあると思う記事が結構あったことを記憶している。

このような状況であったので、筆者に地名の執筆の依頼は早くからきていた。法政大学でロシアの地理学、経済地理の研究を始めておられた渡辺一夫氏から小学館の百科事典執筆の手助けをしてほしいといわれたのが始まりであった。以降お断りすることも多かったが、平凡社、講談社、学研、三省堂、ブリタニカなどの執筆に携り、目下出版準備中の朝倉書店の世界地名大辞典は編集段階から旧ソ連・東欧地域の責任編集者として協力を要請（先に出版された世界地名辞典の執筆はお断りしたが）され、今回は先の地名辞典より充実した内容のものにするとのことであったので、最後の仕事としてボランテイア活動を覚悟して引受けた。しかし、項目の選定、重要度のランク付、執筆者の選定、依頼、原稿の査読のほか自身の担当地名の執筆などでここ数年この仕事に追われ、引受けたものの難渋している日々が続いている。以下では長年地名の執筆を引受けた経験から思ったことの若干について述べてみたい。

一　大きい地名

地名には広大な地域を指す地名もあれば、市名のように比較的広い範囲を指す地名や町村、大字名のような小さい地区を対象とするものまで様々であるが、まず大きな地名から眺める。ここではロシア平原をめぐって種々考えてきたことを述べてみたい。

ロシア平原はヨーロッパロシアと呼ばれる面積約四〇〇万㎢の大部分を占めている。ロシア平原はソ連時代出版された地理学百科事典の記述では広大さ、その範囲、地形、気候などに限定されていて人文的特性との関連については全く触れていない。しかし、ロシア人のキャラクターやロシアの歴史を理解する上で、この広大な国土のもつ意味について多少なりとも触れてくれればと思ったものである。

ロシアという国が広大な国土に拡がる上にその国土が平らで平原の国と呼ばれ、この独得の地形がロシアの国土、民族性の形成に果す重要なファクターとして取上げられてきた。

この広大な平原の有様を二度モスクワから黒海までバスに乗り縦断できたのは得がたい体験として今も鮮烈に記憶に残っている。一度はモスクワからツーラ、黒土地帯のオリョール、クルスク、ベウゴロドを経てウクライナのキエフ、ハリコフ、ドン川口のロストフを通り北カフカスに入り、グルジア軍用道路を通りトビリシ、エレバンに至る長距離の旅である。また一度はモスクワからツーラ、オリョール、クルスクを通りウクライナのハリコフ、ザパロージェを経てヤルタまでバスで走った。この旅によってロシアの広さ、平原のイメージを存分に体験したが、同時にロシア平原が起伏のある波状平原（平均一七〇m、最高点四七二m）であることが実感できた。また、通行した地域を流れる川の多くが高い西岸と低い東岸をもっている風景が脳裡に焼きついている。この体験からよく取上げられるロシアの外敵の侵入に対して脆弱性をもつことが理解できた。平原の故に南からの騎馬民族の侵入を防ぐのが難しいのは当然であるが、また、西からの侵攻に対

しても東岸が低いという地形（ケスタ地形による）もそうである。

一九四一年六月に始まる独ソ戦（ソ連、ロシアでは大祖国戦争と呼ぶ）でドイツ軍の急スピードの進撃、戦車を主体とするドイツ機甲師団の進撃を止めるに足る地形のないことがソ連の国土防衛を困難にしていた。シーモノフのスターリングラード攻防戦を描いた著名な小説「昼となく夜となく」での記述「ロシアのすべての西岸がそうであるように――高く、けはしく……東岸はいつでも低く、なだらかなことであった。そして、ロシアのすべての都市が、また一つの例外もなしに……西側の岸の上に立っていた。……それらのすべてが防衛するには困難だった。なぜなら背後が直接河にくっついて立っていたからだ。それらのすべては反対に奪還することもまた困難だった。なぜなら奪還するためには先ず川を越え、嶮崖をよじて行かねばならなかったからである」。と書いていてあざやかにその特性を描き切っている。この事実はわが国では余り知られていないが、ロシア平原の重要な地形的特質で、歴史に与えた影響も大きい。今日キエフの市街に入り、西岸のキエフの始まった丘に登り対岸をみると低平な土地が続く東岸に新興住宅の高層建造物をみることができる。

広大なロシア平原の涯しなく続く平坦な土地のもつ特性についての考察はこれまで多くの人々が取上げてきた事項である。わが国の長年のベストセラーである「風土」の著者和辻哲郎氏もそうである。氏は「風土」で風土の類型をモンスーン、砂漠、牧場に分けたが、その他に二つの類型があるのを閑却していたとし、世間で余り知られていない「倫理学　下」でユーラシアの草原、ステップ（和辻氏はステッペと書くが）とアメリカへのヨーロッパ人の進出による新しい風土の形成を付加えている。この中でステッペがロシア平原（正確には平原南部）と関連する。そしてステッペ的風土はロシア人の広くて単調なステップ地帯への進出によってロシア人に爆発的な能動性を秘めているが、辛棒強い忍従的な性格が付与されたとしている。また川端香緒里氏はその著「ロシア＝その民族とこころ」でロシア語のプラストール（Prostor、広大な土地の意味がある）の中に大地の広大さと単調さの中で大きな自由を実感すると同時に消えてしまう自由という消極的な意味が含まれていると指摘している。いずれも西欧の人々に理解しがたいロシア人の特性がロシアの自然との関連で形成されたと考えているのである。もっとも自然の特性が一方的にそこに居住する人々や民族性に影響を与えるという自然環境決定論的見解は今日の地理学では問題とされず、住民の生活様式により種々の対応の仕方があり、一様に自然の影響が作用するわけではない。例えば、わが国の丘陵地帯の未開発地が今日まで雑木林のままで維持され、現在大規模な住宅地に変貌しているようなところはヨーロッパであれば家畜を飼育する牧畜が行われる土地利用を採用したと思われるからである。また、ヨーロッパのカトリックとプロテスタントの村落での住民の生活態度、思考様式に大きな違いがありそれが景観、土地利用に大きな違いとなって出ていることは人文地理的研究で明らかにされている。

なお、ロシア平原はステップ地帯だけでなく、ステップ地帯の北に拡がる森林地帯もあり、ロシア人はそこに永らく居住していたので、森林地帯はロシアの森とも呼ばれ、レオーノフの著名な小説が「ロシアの森」と題されていて、ロシア人にとって特別の意味をもっている。従って、ロシアの森とそこに居住してきたロシア人の性格、人文

的特質についても検討することを忘れるべきではない。

二　都市地名

ヨーロッパロシアの都市地名を取扱っていて思うことは、大きくみて二つある。一つは都市名の語源であり、今一つは他民族の襲撃により都市が受ける被害の大きさである。

ソ連時代の事典に出てくる地名の説明は、当時のソ連の地理学界の傾向を反映して経済的分野の説明が中心で、中でもソ連時代の経済発展の目覚しさを中心において書いているのが一般的であった。例えば、ロシア南境の要塞都市ベウゴロドやタムボフにしても地理百科事典での両市の説明では、ベウゴロドは革命前の説明はなく、タムボフの項目では一六世紀ロシアの要塞が築かれたというわずかの説明しか載せていない。また、地誌類もそうで例えば、一九五〇年代から六〇年代にかけて出版された青いシリーズ（表紙が青色なのでそう呼ぶ）の地誌はソ連の共和国、自治共和国、経済地域ごとに出版されたが、一般に革命前の記述は少なく、全くない場合もあった。

しかし、ソ連崩壊後に刊行されたラーポを主編集者とするロシアの都市辞典やゴルキンを主編集者とするロシアの地理百科事典では、ソ連時代と異なり歴史的記述が多くなったのが目につく。ベウゴロドはクリムからモスクワへ向う通路の最短距離に位置しているので、クリムタタールの当市への度々の侵攻を防ぐため土塁で守られた要塞につくられ、ベウゴロドザセーチナヤチェウタ（ロシア南境を守る防衛線で土塁や逆茂木でつくられた防禦施設がタムボフまで延びる）の西縁の拠点であった。従って、市は一七世紀南部国境の重要軍事、行政中心であったと説明されている。この防禦線は図1にあるように、初めはモスクワに近いツーラを通る防衛線が引かれ、ロシアの膨脹とともに防衛線が南下し、タムボフから東のシンビルスクまでシンビルスク防衛線がのび、ベウゴロドとタムボフ防衛線はコズロフで結ばれていた。つまり南境に中国の万里の長城、ローマのハドリアヌスの長城と同様の目的をもつ施設が築かれたのであるが、わが国では余り知られていない。

都市名を調べて気のつくロシアの特性の一つは、他国の

図1　南部防衛線（16—17世紀）

軍隊の侵入の多いことである。わが国ではモンゴルの西征は知られているが、その後成立したキプチャク汗国やその継承国の一つであるクリム汗国とロシアの関係については通常取上げられることが少ない。しかし、先の防禦線の設置でも分るように、南方のステップ地帯で遊牧するモンゴル、タタール、ノガイなどの遊牧民の襲撃が一六世紀まで頻繁に生じていたのである。モスクワの場合でも、ロシアがタタールの軛から解き放たれる端緒となったといわれるクリコヴォの会戦（一三八〇）直後の一三八二年キプチャク汗国のトフタムイシ汗は軍を率いてモスクワを攻撃、占領し、略奪、放火している。また、一四〇八年エディゲイ汗の軍勢がモスクワを包囲している。さらに一五七一年クリム汗国のデフレトギレイ汗の軍がモスクワを攻撃し、クレムリン以外の全モスクワ市街が焼かれ、数千の死者を出している。この他、西方からのモスクワへの攻撃は一七世紀初めのポーランド軍のモスクワ占領があり、ナポレオンのモスクワ占領前の出来事であった。

このような外敵の南と西からの侵入がナポレオンのモスクワ占領の一九世紀初めまで続くわけで、ロシア人の外国の侵入に対する外国人からみて異常とも思われる警戒心は、このような例をみても明らかなのである。それゆえ梅棹忠夫氏の著作「文明の生態史観」で説く暴力の源である乾燥地帯の周辺地域の一つにロシアが入っているのは理由のないことではない。異民族の侵入による被害は先述のモスクワだけでなく各地で生じていて、これがロシアの順調な発展を妨げる要因の一つであったのである。

今一つのロシアの都市名にみえる特性の一つに、現在の多くの都市の語源に他民族の言葉が使用されていることである。地名の語源、由来はソ連時代にも深求されていて、一九六五年発行のポポフの「地名学」では各地の地名の層序を示す図（図2）が出ていて、現在の地名にどの程度の割合で過去に居住していた諸民族の地名が残っているかを研究しているなかなか興味深い書物である。また、ソ連崩壊後に出版されたパスペロフの「ロシアの地理的名称」をみると、ロシアの多くの地名がロシア語起源でないことが分り、ロシアの首都モスクワも

図2　地名の語源による層序

例外ではない。

モスクワの語源については種々の見解があるが、その一つはロシア語からきているのではなく、他民族の使用名称に基づいているとされている。それによれば、この名称はバルト語に源を発していて、バルト語の湿地を意味するマスクヴァ、マズガヴァからきているという。つまりモスクワ川の川名が湿地から川が流れているからであるとされている。ロシアの川でモスクワ川はモスクヴィレカ（レカは川を意味する）と呼ばれ、通常の川がレカ何々と呼ばれているのとは異なることは通説となっていて、モスクワの市名が川からきていることに問題はなさそうである。ポスペロフもモスクワのロシア語起源という説明に説得性がないと述べている。

森林地帯にはフィン・ウゴル系の民族が早くから居住していて、先述のタムボフの語源は先住民族の一民族であるモルドヴァ語のクムバカス（ぬかるみを意味する）あるいはフィン語のタチ（樫）に由来するといわれ、シンビルスクはキブチャク汗国あるいはカザン汗国のタタールの公シンビルに、ツーラはバルト語あるいはチュルク語起源でこれらの言語の湿地、川と関連があるといわれる。他方ベウゴロドは近くにチョークの産地のあることからロシア語のベウゴロド（白い都市）と呼ばれている。

たしかにヨーロッパロシアの中部と北部の森林地帯にはフィン・ウゴル系の民族がロシア人の来住以前から居住していて、そこへロシア人が南方から入ってきたという歴史があるので、フィン・ウゴル系の地名が残っているのは不思議ではない。サンクトペテルブルクが一八世紀初めに建設されたが、建設時ペテルブルクとその周辺に居住していたのはフィン語系のイジョラ、ボティ、エストニア人であり、その後のロシア人の増加と先住民族のロシア化によりフィン系民族の人口は減少していき、今日では圧倒的多数がロシア人になっている。このような動きは各地で生じたが、それでも現在モスクワの東部でモルドヴァ、マリ、チュワシ民族が残存して共和国を形成し、各共和国での民族比率に違い（モルドヴァ人は共和国人口中三二%、マリ人は四二%、チュワシ人は六八%、二〇〇二年）はあるが、完全に消滅、あるいはロシア人に同化したわけではない。

ロシア平原の東部の都市名の起源についても似たような現象がみられる。ヴォルガ川の中流はカザニでこれまで東に流れていた川が西南方向に向きを変え、ヴォルゴグラードまで南下している。この川岸にある大都市、北からカザニ、ウリヤノフスク、サマラ、サラトフ、ヴォルゴグラードの市名の起源をたどると、先述の都市同様ロシア語源ではない。

カザニはカザン汗国の首都として知られているが、カザニはチュルク語で鍋を意味し、この地の地形が凹地状をなしているところからきている。また、ブルガールあるいはタタール人の個人名からきているともいわれるのでロシア語起源ではない。ウリヤノフスクはシンビルスクと呼ばれ、ソ連時代になってレーニンの生地を記念してレーニンの本名ウリヤノフから採った市名である。シンビルスクの語源は先述の通りで、サマラはタタール、チュワシ語のサマル（ヴォルガ川の屈曲部を指す）からきているが、サマル自体チュルク語で袋を意味している。サラトフもやはりチュルク語起源で、ヴォルガ川右岸の高い崖をなす丘陵地サリイタウ（サリイは黄色、タウは丘あるいは山を意味

している）からきている。最後のヴォルゴグラードはソ連時代につけられた名称で、帝政時代はツァリツィンと呼ばれた。語源はチュルク語のツァリスー（ツァリは黄色、スーは水）に由来している。

以上のようにヴォルガ川中流の大都市名をみるといずれもチュルク語起源であり、ロシア人のこの地への進出の新しいことが分る。たしかにカザニの陥落は一六世紀半ばであり、一六世紀後半ロシア人の進出が顕著になった。しかし、その後も地元民族の人口が優勢であり、サラトフから南のヴォルガ右岸地域には一八世紀前半カルムイク（トルグート）人が独立を保って遊牧していたことは清朝のロシアへの使者トウリシェンの報告「異域録」からも明らかである。ロシア民謡では「母なるヴォルガ」とか「ロシアの川ヴォルガ」と歌われ、ロシア人に親しまれているが、同時にロシア人がヴォルガ中、下流域は古くから係ってきたわけではないので、事更このように強調しなければならないのだという見解もある。

結びにかえて

長年地名の執筆に携ってきて考えたことの若干をここに記したが、今日ロシアと思われているロシア平原の各地で、ロシア人の進出以前に先住民族が居住していたことは明らかで、ロシア人はここで先住民族と並存、また先住民族を同化していって地盤を固めていった。現在少数民族としてロシア連邦で共和国を形成し、連邦に組込まれている少数民族は民族ごとにロシア人との係わりは異っている。モルドヴァ、マリ、チュワシ、タタールスタンをみてもロシアへの同化が著しい民族とそうでない民族があり、そのことは研究テーマになるが、筆者自身研究する時間がなかったことを残念に思っている。いずれにせよ地名の説明はソ連時代の政治、経済的な要素だけで満された説明でなく、文化面も含めた総合的な記述、バランスのとれた内容にならなければと考えている。幸い最近ロシアで発刊された地名に関する事典類や専門書が帝政時代の歴史や文化的側面も詳しく取上げるようになったので、今後わが国で出版されるロシアの地名解説も充実した内容のものになると思っている。

参考文献

Под гл. ред. А. А. Григорьев. Краткая географическая Энциклопедия, т.1-5, М., 1960～1966.

А. И. Попов. Географические название, М., 1965.

Под. гл. ред. Г. М. Лаппо. Города России, энциклопедия, М., 1994.

Под. гл. ред. А. П. Горкин. География России, энциклопедия, М., 1998.

Е. М. Поспелов. Географические название России, М., 2003.

和辻哲郎『風土』岩波書店、一九三九。

シーモノフ・小野俊一訳『昼となく夜となく　上』角川文庫、一九五三。

梅棹忠夫『文明の生態史観』中公文庫、一九七四。

川端香男里『ロシア　その民族とこころ』悠思社、一九九一。

土肥恒之『よみがえるロマノフ家』講談社、二〇〇五。